

新潟県津南町で採集された北米産エノキグサ属の外来種 *Acalypha rhomboidea* Raf.

会長 勝山輝男

1月の例会の際に会員のIさんから、昨年(2022年)10月12日に新潟県津南町見倉で採集された不明植物の同定を頼まれた。旅先で枯れかけた個体を標本(KPM-NA0224895)にしたもので、標本としては不完全なものであったが、調べてみることにした。同行したTさんが撮影された写真も提供していただいた。茎の上部の葉腋につく花序がオレンジ色にきれいに色づき、人目を惹いていたが、栽培されているようには見えなかったという。思いつくものはなかったが、エノキグサに似た雰囲気がある。

葉腋の萼状のものを実体顕微鏡下でピンセットを使っていねいに開いてみると、中にトウダイグサ科と思われる3室の子房があり、裂けて3個の種子が出てきた。萼状に見えたのは、エノキグサの苞と同じもので、縁が6片に深く切れ込み、脈上や縁に粗毛と有柄の腺があった。葉は互生、葉柄は葉身の1/3~2/3の長さがあり、葉身は菱状卵形~菱状披針形で長さ2-4cm、縁には低鋸歯があり、両面脈上に粗毛があった。

トウダイグサ科エノキグサ属は世界の熱帯・亜熱帯を中心に約450種があり、日本にはエノキグサ *A. australis* のみがある。沖縄にはキダチアミガサソウ *A. indica* が帰化し、アカリア *A. wilkesiana* やベニヒモノキ *A. hispida* が栽培・逸出している。温帯にまで分布するものは少数で、エノキグサの他には北アメリカに少数の種があるに過ぎない。そのうちのヒメアミガサソウ *A. gracilens* (千葉県三里塚と山形県) とアレチアミガサソウ *A. ostryifolia* (横浜市旭区) の2種は日本に帰化記録がある。

採集された場所は多雪地の標高700mの所なので、北アメリカ産の少数の種の一つとあたりをつけ、Flora of North Americaのエノキグサ属を調べた。検索表で該当したのは *A. rhomboidea* で、記載やイラストとも矛盾はなく、ネットで検索して表示された画像もよく一致した。*A. rhomboidea* は合衆国からカナダの東側半分に広く分布する1年草で、湿地、河川敷、農地、攪乱地に生育するという。今のところ日本

への帰化の記録は見当たらない。

*A. rhomboidea* が採集された場所は津南町見倉のトチノキの大木、カタクリ群生地、風穴などがある観光スポットで、その駐車場の隅に2㎡くらいの面積でかたまっていたそう。津南町のこのあたりは長野県栄村とともに秋山郷として知られる場所で、見倉は標高700m、苗場山北方の小松原湿原(標高1600m)の登山口の一つで、秘境といえるような山奥である。ネットで調べてみたが、この植物の薬用利用や園芸利用の情報は得られなかった。どのような経緯でこの草がここに持ち込まれたのか不思議である。

ヒメアミガサソウは *A. rhomboidea* に似ているが、葉は線状披針形で葉柄が短く、苞は切れ込みが浅く9-13裂する。『千葉県植物誌(千葉県の自然誌別編4)』に標本写真が掲載されている。アレチアミガサソウは2013年に横浜市旭区で採集されたもので、葉は卵形で基部が心形、穂状の花序は上部の葉腋と枝先につけ、苞は10-15深裂する。秋山(2013 Flora Kanagawa no.77: 916-917)に生態写真、『神奈川県植物誌2018』に線画が掲載されている。キダチアミガサソウは『帰化植物写真図鑑(全農教)第1巻』に写真がある。



図 津南町の *Acalypha rhomboidea* 左: 茎の上部(写真よりスケッチ) 右上: 苞 スケール 2 mm 右下: 種子 スケール 1 mm (苞と種子は KPM-NA0224895)